

県営農村基盤総合整備パイロット事業（尾鈴Ⅱ期地区三納代工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査及び町内遺跡調査概要報告書

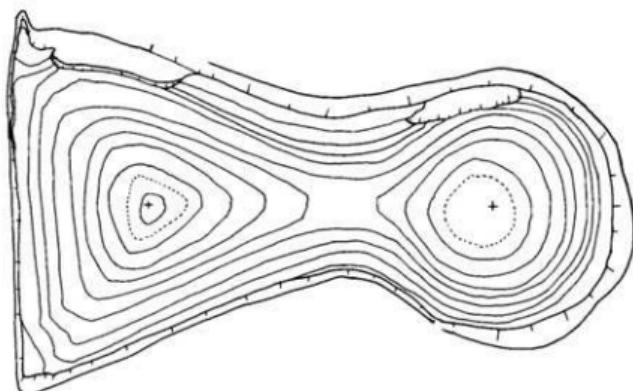
MI NA SHIRO  
三納代地区遺跡  
OKU ZAKI  
奥 崎 遺 跡

NYU TABARU  
新田原古墳群（確認調査）

56号墳・65号墳

町道弁指一南原線改良に伴う埋蔵文化財確認調査

BEN ZASHI SHITA  
弁 指 下 遺 跡



1993.3

宮崎県新富町教育委員会

## 序

新富町教育委員会は、宮崎県の委託を受けて、平成4年度、三納代地区県営農村基盤総合パイロット事業地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。あわせて新田原古墳群確認調査・弁指下遺跡確認調査を実施しました。

三納代地区遺跡の調査では、遺物の散布は認められるものの遺構は検出されず、河川の氾濫等の跡づけをするにとどまりました。また、新田原古墳群の確認調査では、各々古墳に伴う溝が巡っていることなどが確認され、現状より相当大きな古墳の姿を考えさせるものでした。

発掘調査に際しましては、宮崎県一つ瀬土地改良事務所および一つ瀬土地改良区、地元各地区土地改良組合、また工事業者である佛井閑建設や、祇園原地区の地権者を初めとする地元町民の御理解とご協力を頂きました。ここに心から御礼申しあげます。

平成5年3月

新富町教育委員会

教育長 清 郁 雄

## 例　　言

1. 本書は、三納代地区のほかの県営農村基盤総合パイロット事業に伴い、平成4年度に実施した三納代地区の奥崎遺跡、及び町内遺跡（新田原古墳群65号ほか確認調査：弁指导下遺跡確認調査）の概要報告書である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 新富町教育委員会

教　育　長 清　郁　雄

社会教育課　課　長 富　田　博

〃　　課長補佐 河　野　正　勝

〃　　係　長 齋　藤　久　明（事務担当）

〃　　主　事 有　田　辰　美（調査担当）

調査指導・協力

宮　崎　大　学　助　教　授 柳　沢　一　男（特別調査員）

宮　崎　県　教　育　庁　文　化　課 北　郷　泰　道（調整担当）

3. 本書の執筆・編集は有田がおこなった。

## 本文目次

第一章 新富町の位置と地勢 .....	1
第二章 三納代地区遺跡 .....	1
奥崎遺跡 .....	1
風早第Ⅱ遺跡出土材の樹種同定結果について（概要） .....	5
第三章 史跡新田原古墳群確認調査 .....	8
第65号墳 .....	8
第56号墳 .....	13
第四章 弁指下遺跡確認調査 .....	18

## 挿図目次

三納代地区遺跡調査	
第1図 新富町位置図 .....	1
第2図 三納代地区（奥崎）遺跡位置図 .....	2
第3図 奥崎遺跡遺構平面図 .....	4
史跡新田原古墳群確認調査	
第1図 新田原古墳群（祇園原地区）分布図 .....	9
第2図 第65号墳遺構平面図 .....	11
第3図 第56号墳遺構平面図 .....	14
弁指下遺跡確認調査	
第1図 弁指下遺跡遺構平面図 .....	20



第1図 新富町位置図（遺跡位置図）

## 第一章 新富町の位置と地勢

新富町は、宮崎県の中央宮崎平野の北側の一角を占める児湯郡に属し、西に西都市、北に高鍋町、南に一つ瀬川を界し、宮崎郡佐土原町に接し、東側を日向灘に臨む。県都宮崎市より主要交通動脈となっている国道10号線・地方幹線鉄道JR日豊本線を北に約20kmと比較的交通の便に恵まれ、気候は温暖である。町域は一つ瀬川左岸の主に水田やハウス園芸に利用される冲積平野と畑作に利用される洪積台地に占められる。この洪積台地は広く宮崎平野に広がる平坦地の顕著な段丘地形となっており、地形区分でいう茶臼原面（海拔約120m）、三財原面（海拔約90m）、新田原面（海拔約70m）の三つに分けられている。この町域のほとんどを占める洪積台地を大きく東西に開析して、鬼付女川がほぼ東流している。この鬼付女谷の洪積台地裾部と一つ瀬川左岸の新田原台地の裾部には数段の河岸段丘が発達し、河川との間には自然堤防が発達し旧河道と考えられる低地など冲積平野が広がっている。また、鬼付女谷の出口を含む日向灘に臨む東部海岸平野には宮崎平野と同様、数列の砂丘が発達している。

## 第二章 三納代地区遺跡

### 奥崎遺跡

#### 〈調査に至る経緯〉

平成4年度、新富町内で宮崎県一つ瀬土地改良事務所がほ場整備事業を計画した三納代地区、祇園原工区の埋蔵文化財について県教育庁文化課に照会があり、文化課および新富町教育委員会では、事業予定地内の埋蔵文化財についての試掘調査および分布調査を実施した。（祇園原工区は県教育庁文化課が担当）三納代地区においては、昨年度調査の志戸平・風早・奥牟田地区に遺跡が確認されており、あわせて分布調査による遺物（土器）の散布から遺構の拡がりが予想されていた。

これを受けた県教育庁文化課、県一つ瀬土地改良事務所、一つ瀬土地改良区、新富町教育委員会、町耕地課と事業予定地内に所在する埋蔵文化財について協議した結果、現地調査は水稻の刈り入れが済む8月後半から予定したが、鬼付女川改修工事など諸般の事情から大幅に遅れた。奥崎地区の調査は、計画実施段階で表土の削平・移動が比較的浅く、少ないことから埋蔵遺構に影響を与えないことも考えられ、排水溝の掘削・表土剥ぎの工事

を中心に立ち会い、一部面的に表土を剥いで確認することとなった。

調査は、三納代地区については新富町教育委員会が主体となり、社会教育課主事有田があたった。

#### 〈立地と環境〉

この奥崎遺跡の所在する下鬼付女谷周辺は、新富町の地形において優勢な洪積台地を西から東に大きく開析して流れる鬼付女川の流れも比較的緩やかな下流域に属し、台地の裾部には、河岸段丘や小さいながらも扇状地形が発達している。また、鬼付女川の流路は、東側下流域を砂丘列により流れを止められ、新田原台地より派生した丘陵列と鬼付女峰（標高約50m）の間に流路をもとめている。この為か昭和58年9月には、豪雨のため町の中心街を形成する平田地区に大水害をもたらし、さらに河川改修のなった平成2年9月には、今回調査した奥崎遺跡も一部冠水している。



第2図 三納代地区(奥崎)(遺跡位置図)

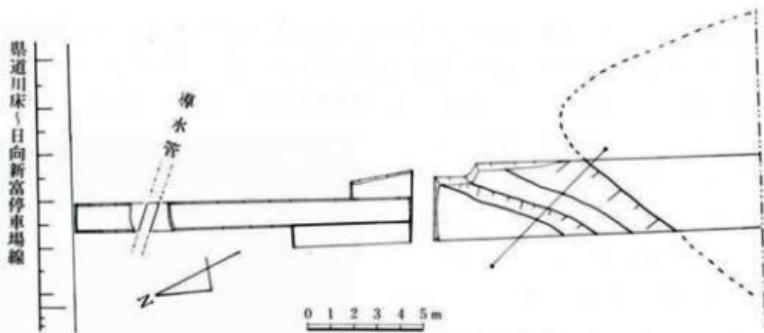
周辺の遺跡としては、北側台地上に古墳時代の住居跡約280軒が確認された上蘭遺跡や14基の古墳の周溝が確認された藏蘭古墳群（県指定富田村古墳の一角を形成する）や地下式横穴墓1基と弥生時代終末期の土壙墓7基、縄文時代後期の住居跡1軒が確認された倉園遺跡があり、さらに奥遺跡（弥生～古墳時代：遺物散布地）、奥崎遺跡（弥生時代終末期：遺物散布地）があり、西側約500mには年神遺跡（弥生～古墳時代：遺物散布地）、南西の台地上には、県指定富田村古墳7・8号墳や弁指平遺跡（弥生～古墳時代：遺物散布地）がある。また、南側には、下屋敷1号墳（古墳時代初頭？）や鬼付女西遺跡（弥生～古墳時代：住居跡ほか）園田遺跡（弥生～古墳時代：住居跡ほか）があり、東側約500mには、鐘遺跡（弥生中期・古墳時代：住居跡ほか、円墳）や今別府遺跡（弥生前期：遺物散布地－板付II式土器出土）などがあり、この流域は新富町における弥生～古墳時代の遺跡の密集地帯となっている。



図版1 奥崎遺跡全景



図版2 奥崎遺跡遺物出土状況



第3図 奥崎遺跡遺構平面図

#### 〈調査の概要〉

調査は現道路西側の部分が、河川改修の残土置場の関係から最終段階で、道路撤去の後に行うこととし、県道川床一日向新富線の改修時に確認された奥崎遺跡（弥生時代終末期：溝を確認、未調査）に近い部分約3,000m<sup>2</sup>（第2図参照）の表土剥ぎを行い、表面の精査を行った。また、排水溝による掘削部分は掘り下げた。

その結果、排水路敷については一部土器が検出され、掘り下げると池や川のほとりと考えられる部分が確認されたのみであった。

#### 〈遺構と遺物〉

遺跡は、旧池（川）の一部と思われ、特に人工の手が加えられた形跡はなく、明確な遺構は検出されなかった。遺物は、旧池（川）の一部とおもわれる南側の落ち込みの埋土上層には外面に格子タタキ目、内面に円形タタキ目を残す須恵器壺片1や二重口縁壺の口縁片ほか弥生土器片が、また、ヘラ切り底の土師皿1個体分、青磁碗の口縁片1、楕円形の長軸側を調整した石垂1個が検出されている。

#### 〈まとめ〉

土器等の遺物の出土が少なく、また遺物の出土時代のバラツキから流れ込みの可能性が高く古墳時代以降の水路変更に伴う遺構と考えられる。

なお、地形の面から調査されている長岡信治氏\*によるとこの下鬼付女谷周辺はアカホヤ降下（6,300年前）から5,000年前までに大きな海退が認められ、さらに5,000～4,800年前、3,000年前、1,600年前の3回の小さな海退期の始まりが指摘されており、このことは昨年調査が行われた風早第II遺跡の古墳時代初期にかかる堰の一時期に集中埋没したことを考える上で興味深く、今後周辺の遺跡について堆積土層の確認に注意したい。

\*長岡信治ほか「第4紀研究」第30巻第2号『宮崎平野の完新世地形発達史』1991長岡氏には、直接現地で教示願った。

## 付、風早第Ⅱ遺跡出土材の樹種同定結果について（概要 一部省略）

古環境研究所

### 1. 試料と方法

風早第Ⅱ遺跡出土の材14点の樹種同定を行った。試料は、両刃カミソリを用いて、木材の横断面（木口面）、放射断面（柾目面）、接線断面（板目面）の基本的な3断面の切片を作成し、光学顕微鏡によって40～600倍で観察した。樹種同定は、これらの試料標本をその解剖学的形質および現生樹木の木材標本との対比によって行った。試料は結果とともに別表に一覧する。

### 2. 結果と記載

同定の結果は、4種類の分類群が同定され、各同定レベルによって亜属名・種名によって表した。結果は表に一覧する。以下に同定根拠となる解剖学的形質を記載する。

イチイ *Taxus cuspidata* Sieb. et Zucc. イチイ科、図版3-1a～1c.

仮道管と放射柔細胞の2種類によって構成される針葉樹材で、早材から晩材への移行はゆるやかで晩材部の幅が狭く均質である（横断面）。仮道管壁には顯著な螺旋肥厚が認められる。放射組織はすべて柔細胞からなり、分野壁孔はヒノキ型で1分野に1ないし2個存在する（放射断面）。放射組織は単列で1から10細胞高のものが多い（接線断面）。

以上の形質と分布域からイチイに同定される。イチイは日本、朝鮮半島、中国東北部、シベリア東部の亜寒帯から温帯にかけて分布する。九州の高隈山まで分布するため、本遺跡ではかなり厳選した選材とみられる。常緑の針葉高木で樹高15m前後、径約1mになる。材は緻密で彈力性が強く、器具・彫刻・ろくろ細工に用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科

（省略）

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科、図版3-2a～2c.

中型の道管が放射方向に配列する放射孔材で、広放射組織と単列のものが存在する（横断面）。道管は單穿孔で、放射組織は同性で柔細胞からなる（放射断面）。放射組織は肉眼でも顯著な広放射組織と単列放射組織からなる複合放射組織型である（接線断面）。

以上の形質からコナラ属アカガシ亜属に同定される。イチイガシ・アカガシ・アラカシなど8種があるが、種の識別は困難である。宮城県以南の日本、韓国、台湾、中国の暖温帶に分布し、照葉樹林の主要構成要素である。常緑高木で、種類によっては樹高30m、径1.5mにも達する。材は極めて堅硬、強靭、弹性が強く、水湿に強い。農具・土木・建築

・樺などに使われる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科、図版3-3a~3c.

100~500μにも達する梢円形で大きな道管が1ないし4・5列で孔圈を形成する環孔材で、その配列には固体差がある。孔圈では道管はほとんど単独で、孔圈外で径の急減した小道管が火炎状に配列する(横断面)。道管の單穿孔で、放射組織は平状細胞のみからなる同性放射組織である(放射断面)。放射組織は単列同性で平等に分布する(接線断面)。

以上の形質からクリに同定される。日本特産で北海道南部から九州に分布する落葉高木で、高約20m、径約1mになる。材は、耐朽・保存性が極めて高く特に水湿に良く耐え、建築や土木など用途は広汎である。

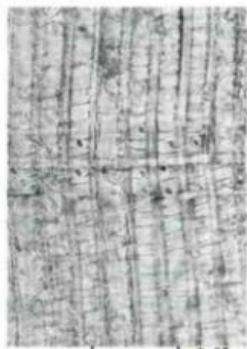
表1 風見第Ⅱ遺跡出土材の樹種一覧

地點 No.	試 料	分 類 群	
		種類	樹種
1区	柄	イチイ	<i>Taxus cuspidata</i> Sieb. et Zucc.
1区	又鋸	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
1区	杭?	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
1区 上面	杭	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
1区 No.1	杭	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
2区 No.1	杭	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
2区 No.2	杭	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
2区 No.3	杭	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
2区 No.4	杭	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
2区 No.5	杭	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
2区 No.6	杭	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
2区 No.7	杭	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
2区 No.8	杭	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
4区	板	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> (Sieb. et Zucc.) Endl.

図版3 風早第Ⅱ遺跡出土材の顕微鏡写真



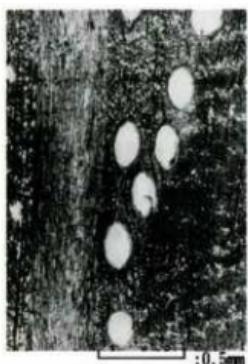
1a. イチイ (横断面) 1区柄



1b. 同 (放射断面)



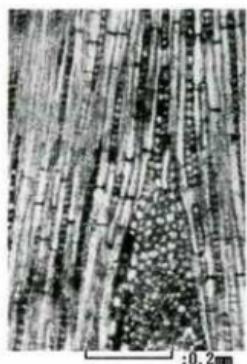
1c. 同 (接線断面)



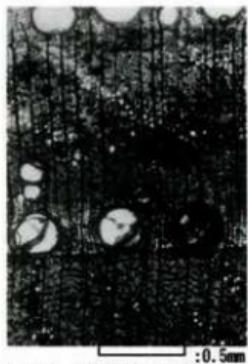
2a. アカガシ亞属 (横断面) 1区又狀



2b. 同 (放射断面)



2c. 同 (接線断面)



3a. クリ (横断面) 1区杭?



3b. 同 (放射断面)



3c. 同 (接線断面)

### 第三章 史跡新田原古墳群確認調査

#### 第65号墳（前方後円墳）

##### 〈調査に至る経緯〉

本遺跡は、国指定史跡新田原古墳群に含まれる。当地は、国指定史跡新田原古墳群第65号墳の周溝にあたる部分と考えられる場所であるが、指定地区外となっていた。

平成4年6月、隣接する民間宅地の拡張計画があることを知り、調査確認の上、予想される周溝が確認された場合についての保護について、地権者及び購入予定者に協力を求めることとなった。今回の調査は、その周溝の確認調査である。試掘調査の結果、ほぼ周溝の範囲は確認でき、購入予定者の周溝の保護について確認をすることが出来た。

調査は、平成4年6月7日～7月8日の間行なった。

##### 〈立地と環境〉

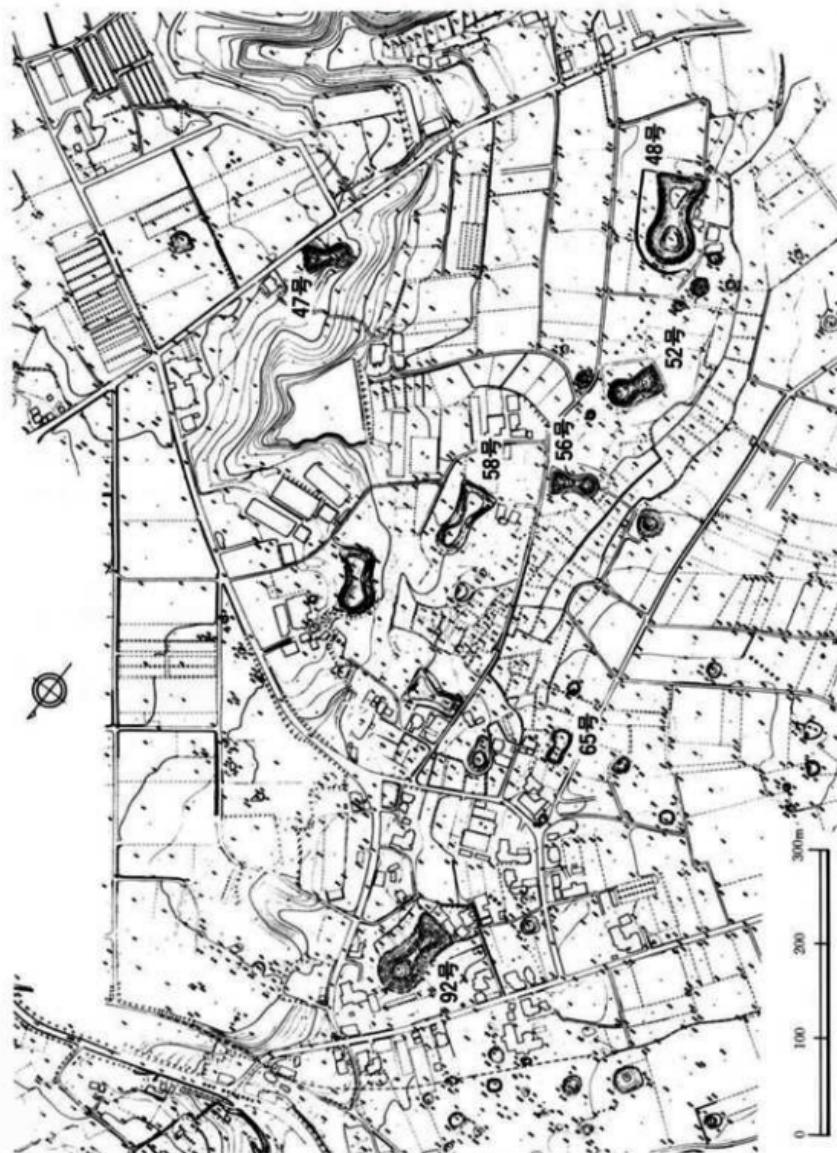
国指定史跡新田原古墳群は、総数207基（前方後円墳25基、方墳2基、円墳180基）を数える宮崎県内第2の大古墳群で、新富町大字新田字祇園原の台地や、台地縁、台地裾部に広く分布する。これらは、大きく4つの群に分けられ、字竹ヶ山の台地上及び字塚原の河岸段丘上に所在する塚原支群（前方後円墳2基、円墳3基）と、現航空自衛隊新田原基地内にあった石船支群（前方後円墳3基、方墳1基：調査消滅）、山之坊・竹渕・中村地区の台地縁や丘陵上及び台地裾部を中心とした山之坊支群（前方後円墳6基、円墳33基）、また、新田原古墳群中、最も集中した祇園原・春日地区の標高73m内外の台地上や、一段高位の段丘の台地縁を中心に分布する祇園原支群である。

今回調査の65、56号墳は祇園原支群に属し、台地の中を北西から南東に小さく開析する谷に沿って分布する前方後円墳を中心とした地域となっている。この古墳列上の西北側は戸数37戸の祇園原の集落となっている。

##### 〈調査の概要〉

調査は、後円部における現況での中心点と、前方部最高位の中心を基軸とし、その延長線上の前方部裾に第1トレンチ（1.4×4.8m）、前方部北側コーナー裾部に第2トレンチ（1.2×8.6m）を掘り裾部の葺石確認のち一部拡張を行なった。

また、基軸に直角に北側くびれ部に第3トレンチ（1.0×10.0m）を、後円部中心部より後円部中心に直角に第4トレンチ（1.0×10.0m）を掘り、第3と第4トレンチの間を面的に広げ葺石の検出に努めた。また、後円部中心より畠地コーナーに向かって裾部より



第1図 新田原古墳群(紙園原地区)分布図

第5トレンチ(1.4×10.0m)を入れ、最後に後円部側に中心線に沿って第6トレンチ(1.2×6.5m)を入れた。今回の調査では、周濠の確認ということで濠の内・外の立ち上がりに留意した。

#### 〈遺構と遺物〉

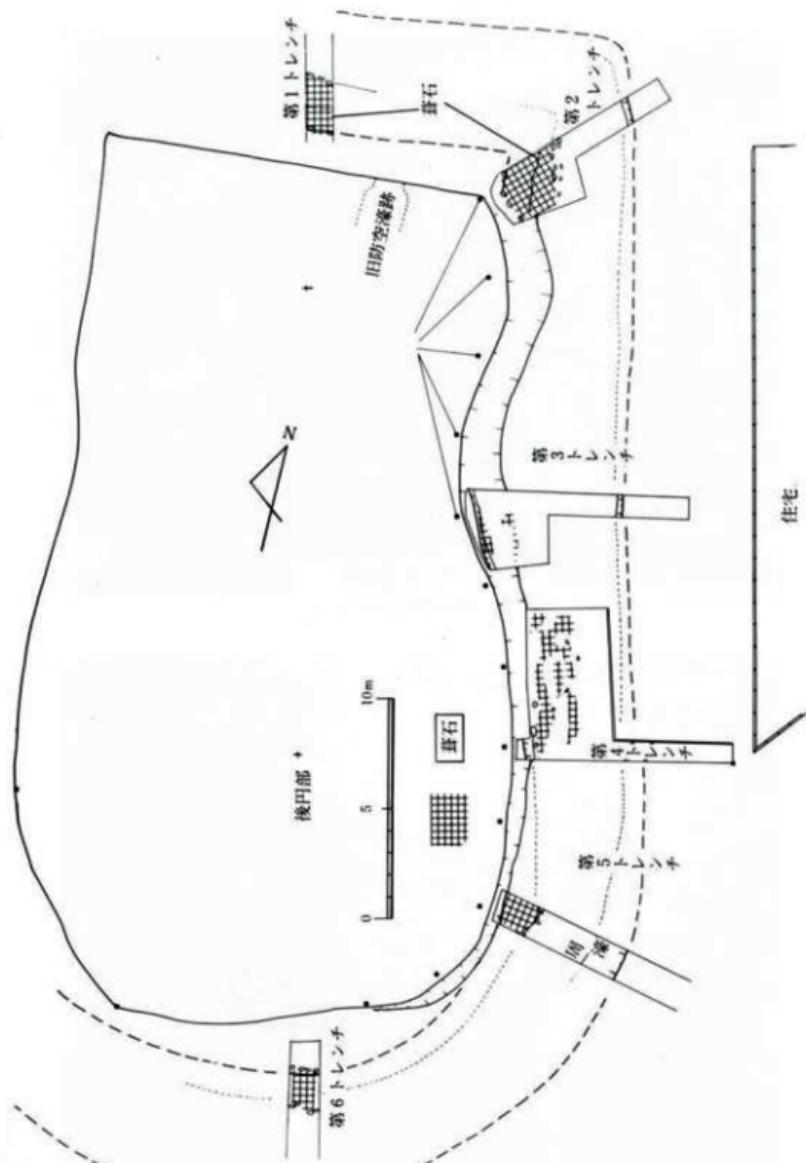
調査の結果、65号墳は墳長約42.2mを計り、後円径約23.2m、高さ約4.3m、前方部幅約19.9m、高さ約3.8m、くびれ部幅約18.2mで、後円部裾より幅約5.2mの楯型周濠を持つことが確認された。前方部北側コーナー（第2トレンチ）及び中心線上（第1トレンチ）裾部には葺石積み上げの基底石が確認され、一部上方よりの崩落石がみられるが比較的良好な状態で出土している。第3～6トレンチでは、葺石は比較的少ないが、基礎部を確認するに充分で周濠底面には、落ち込みの葺石が少しみられた。

遺物は全てのトレンチで1点も確認されていないが、墳丘の裾部上面で外面に平行タタキを有する須恵器大甕片の細片が数点採集されているのみで、土師器類は採集されていない。これらは、古墳周囲の畠地出土の遺物の投げ上げと思われ、現状では本墳に伴うものと確認できない。

#### 〈まとめ〉

今回の調査は、周濠部分の確認調査であり、時代を特定する資料の検出には恵まれなかったが、墳丘裾部の一部削除等にあわせ葺石が確認された。

なお、地権者の事後の同意もあり、次年度に面的な広がりと遺構に伴う遺物とを確認したい。



第2図 第65号墳遺構平面図



図版4 第65号墳全景（上から）



図版5 第65号墳2号トレンチ葺石検出状況

## 第56号墳（水神塚：前方後円墳）

### 〈調査に至る経緯〉

本遺跡は、平成4年5月に宮崎県一つ瀬土地改良事務所より、祇園原地区の県営は場整備事業の計画の提示があり、これを受けた宮崎県教育庁文化課と新富町教育委員会では、国指定史跡新田原古墳群の保護のため、これまで確認された遺構にあわせて予想される周濠等の確認が急がれていた。

### 〈立地と環境〉

56号墳は、群中最大を誇る48号墳（赤五郎塚：前方後円墳）と65号墳の中間にあたり、水田に利用されている開析谷が北東に枝分かれする分岐点に位置し、水田に突き出す形で立地する。北側約50mには、埴輪等を出土している58号墳（百足塚）があり、谷（水田）を挟んで52号墳（前方後円墳：伝金銅製単龍柄頭出土）が所在する。

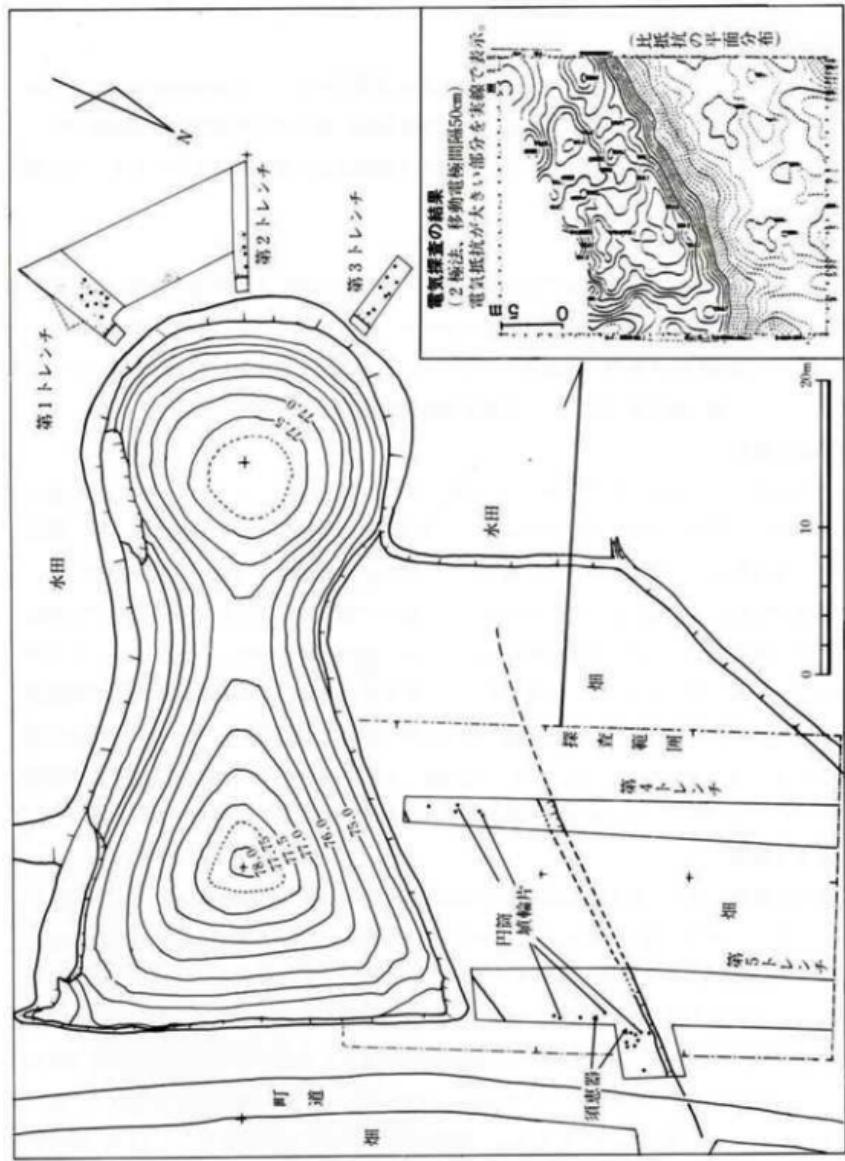
### 〈調査の概要〉

調査は墳丘の北東部の牧草の取り入れの終了した畑の部分にグリッドを設定し、平成4年9月28日より国立奈良文化財研究所西村 康氏ほかの御協力を得て地中レーダー、電気探査、磁気探査の3種類の探査を行ない、その調査の結果によって試掘することとした。

調査の結果は第3図に示すデータのとおりで幅9～10mの周濠を予想させ、その外側に幅の狭い溝状遺構の反応のある位置を中心にトレンチの位置を決定し、第4トレンチ（約2.0×25.0m）、第5トレンチ（3.5×20.0m）を入れた結果、鍵穴型墳形に沿って周濠が確認された。加えて幅の狭い溝状遺構は耕作に伴うものと確認することができ、探査の有効性をより高める結果となった。また、後円部にも計3本のトレンチを入れ、周濠の確認をすることにした。これに基づいて農政部局と調整し周囲を含めて保存することになった。

### 〈遺構と遺物〉

調査の結果、葺石と思われる河原石等は溝内および墳丘でも確認されておらず、第4トレンチでは、確実な墳丘への立ち上がりが認められなかつたが幅約9.5m以上、深さ約0.5mの周濠を持つことが確認された。また、第5トレンチでは周濠のコーナーは確認できなかつたがほぼ同じ幅で周濠がのびていた。後円部の3本のトレンチ（1～3）では墳丘裾まで水田に削り込まれ、水田下の周濠は床面を僅か2～5cmの痕跡を残すのみで墳丘裾の立ち上がりは部分的な確認に止つた。この結果、56号墳は墳長約52mを計り、後円径約23m、頂径約6m、高さ約5.7m、前方部幅約32m、高さ約6.5m、くびれ部幅約16.2mで、前方部が約0.8m高く幅の広い非常に発達した前方後円墳で周濠が墳丘に沿つ



第3図 第56号墳遺構平面図



図版6 第56号墳全景（上から）



図版7 第56号墳検出周濠状況



図版8 第56号墳検出周辺状況



図版9 第56号墳5号トレンチ遺物出土状況

て幅9～10m内外の周濠を復元できる。

遺物は全てのトレンチで円筒埴輪片が多数確認されているが水田部分（第1～3トレンチ）はとくにローリングされて固体復元までいたっていない。第4トレンチでは、円筒埴輪片にあわせ第1層の耕作土中より須恵器大甕片の細片1点が出土している。第5トレンチでは、縁ハケ、1次調整のみの須恵質を含む円筒埴輪片にあわせ刀、盾（？）、家（？）、人物とおもわれる形象埴輪の一部が出土している。また、表面に格子目タタキ、内面に円形タタキをもつ須恵器大甕片17点、口縁部1点、脚柱部に細かい波状文を施した方形透かしをもつ高環脚部の一部や高環の口縁片1点も同じ埋土で検出されている。

#### 〈まとめ〉

今回の調査は、周濠部分の保存のための確認調査であり、初期の目的は達することができた。ここで形象埴輪が確認されたことは特質されるできごとでこれまで若干の形象埴輪の出土がつたえられた新田原古墳群に新たな資料を加えた。さらに種々の形象埴輪の破片が検出された第5トレンチの周囲、前方部側周濠が道路敷きとなっており、今後、面的な広がりと遺構に伴う遺物とを確認していきたい。

遺物については未整理の段階であるが時期についてここでは、出土円筒埴輪が共通編年のV期にあたることや墳丘における前方部の発達から6世紀後半としておきたい。

## 第四章 弁指下遺跡確認調査

### 〈調査に至る経緯〉

本遺跡周辺については、新富町建設課より町道南原～弁指線の改良工事の計画（平成7年度）が提示され、周辺の遺跡についての照会があった。町教育委員会では当該地において、分布調査の結果、土器片の遺物が採集されたことや、現地周辺に昭和10年代後半道路新設工事において、横穴墓らしきものがあり、勾玉等が採集されていること、また、「弁指」の地名において、古代～中世における「弁済使」との関連も考えられることから、試掘調査により遺構の確認を行ない本調査のための参考とすることになった。

### 〈立地と環境〉

弁指下遺跡は、前掲の奥崎遺跡の南東約500mの新田原台地から派生する丘陵の末端にあたり、標高約12m、水田面からの比高約5mの台地に所在する。遺跡面はほぼ平坦面となっており、菜園として利用されている。

### 〈調査の概要〉

調査は、当地に建物等の構造物や菜園で利用されていることもあり、部分的にトレンチを入れ、遺構の有無を確認することとなった。トレンチは作物および小屋等の構造物の関係上台地を南北に横断する形にトレンチ1～2を入れ、これより西側にトレンチ3、北西に12m離れて任意にトレンチ4の計4本入れ、部分的に拡張することとした。併せて崖面に予想される横穴墓の確認のため、密生する竹の伐採も行ない崖面の窪みをトレンチ棒により突き刺し、羨道部の探索をおこなった。

### 〈遺構と遺物〉

1～3のトレンチでは、僅かに窪んだ部分が確認されたが柱穴等の明確な遺構は確認できず、トレンチ4に遺物を伴わない礫群の露出を認めたのみであった。崖面の予想された横穴墓はなかに瓦や石が詰め込まれた掘りこみが2つ認められた。

遺物は表面で採集した土師の小片と表土内から出土した陶器片、土師片のみであった。

### 〈まとめ〉

調査した平坦部においては、現在のところ遺構は確認できていないが瓦や石が詰め込まれた掘りこみとあわせ次年度の本調査で残りの確認に努めたい。

なお、本調査の過程で現地に江戸時代の高鍋藩と佐土原藩の境界があり、この境界部分に幹周り240～120cm、推定樹齢200年の境界木と伝えるユスノキを確認した。



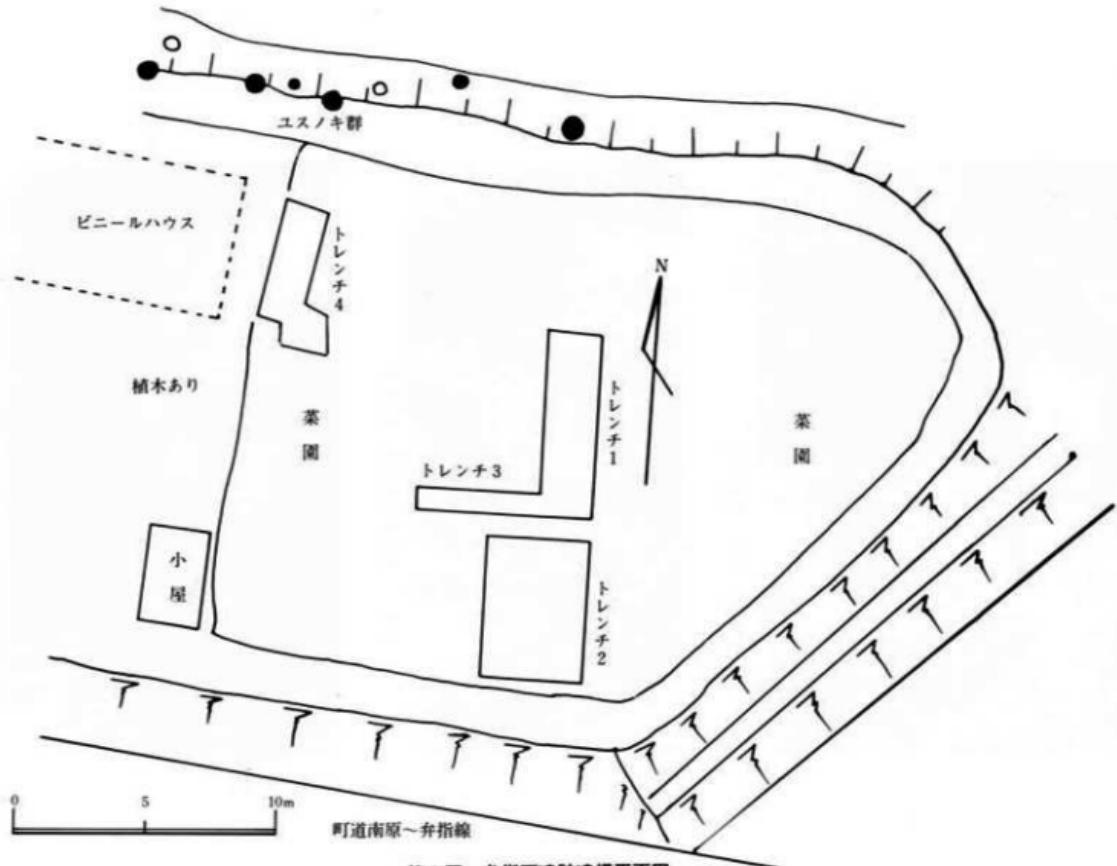
図版10 弁指下遺跡全景（1～3号トレンチ）



図版11 弁指下遺跡全景 搾乱？



図版12 弁指下遺跡全景 4号トレンチ検出標群



第1図 弁指下遺跡遺構平面図

新富町文化財調査報告書 第15集

県営農村基盤総合整備パイロット事業  
(尾鈴Ⅱ期地区三納代工区)に伴う  
埋蔵文化財発掘調査及び町内遺跡調査概要報告書

奥崎遺跡

新田原古墳群(確認調査)

56号・65号墳  
弁指下遺跡

発行年月日 1993年3月

発 行 新富町教育委員会  
印 刷 ㈲印刷センタークロダ